

● どんな人だったのか ●

今回は、現存する最古の仏典とされる『スッタニ・パータ』から、仏教の原点を学びます。その前に仏教の開祖となつた人物について、少しお話ししたいと思います。この人物は「シャカ族の尊い人」を意味するシャーキヤムニ・釈迦牟尼・釈尊をはじめ、いろいろな敬称で呼ばれてきましたが、ここでは近年の仏教研究でよく使われるゴータマ・ブッダ(ゴータマ族の悟った人)と呼んでおきます。実はブッダ(仏陀)は仏教が登場する前から幾人も現れています。そこで、出身氏族のゴータマを付けて区別したのです。

ゴータマ・ブッダの伝記はそれこそ星の数ほどもありますが、そのほとんどすべては後世の創作です。たとえば、最も有名なアシヴァゴーシャ(馬鳴)の『ブッダチャリタ(仏所行讃)』は、この人物が活動していた時代から少なくとも500年以上も後の作です。そのため、確実なことはほんの僅かしかありません。理由はこの人物に関する

● 容姿については『スッタニ・パータ』に「美しく、大きく、清らかで、虎か牡牛か獅子のように立派な人」と書かれています。

る個人情報がとても乏しいからです。なぜとても乏しいのかというと、インドの人々は、その人物の説いた教えには関心を怠いても、経歴には関心を怠かなかつたからです。以下に、重要な事柄を記します。

現在のインドとネパールの国境地帯のネパール寄りのどこかで、シャカ族の王だったスッドーダナ(淨飯=白米の飯)を父として、マーヤー(幻)を母として、生まれました。母は産後まもなく亡くなってしまったので、母の姉妹のマハーラジャーパティ(摩訶波闍波提/大愛道)に養育されました。

まだ解決されていない最大の問題は生没年代です。生誕は紀元前624年(紀元前463年の間、入滅は前544年ほども後のことです)。

最初期に成立した仏典は原始仏典と呼ばれ、パーリ語で記述されています。ゴータマ・ブッダの説教は、マガダ語の東部方言からパーリ語に転換されて、こんにちまで伝えられてきたのです。後発の大乗仏典はサンスクリットで記述されています。

パーリ語とマガダ語とサンスクリットは、同じ系統の語ですが、パーリ語とマガダ語とサンスクリットの言葉とマガダ語は俗語で、サンスクリットは雅語という関係になります。いずれもヨーロッパ系の言語、たとえばラテン語などと文法や単語も似ていて、日本語や中国語とはいろいろな意味で大きく異なっています。

パーリ語以外に、ガンダーラ語による伝承もありましたが、紀元後5世紀に現在のテーラワーダ仏教(上座仏教)の基礎をきずいたブッダゴーサが、パーリ語以外で伝えられてきた教えはゴータマ・ブッダの教えではないとみなし、廃棄してしまいました。

現時点では読むことができる

企画 仏教 通信

第83号

発行日 令和8年3月1日
発行所 有限会社 仏教企画
〒252-0016 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel: 042-703-8641 / Fax: 042-782-5117
発行人 藤木隆宣
編集人 山河宗太(OFFICE-SANGA)
Email fujiki@water.ocn.ne.jp

29歳のとき、妻と子のラーフラ(「不吉な星の」ラーフを退治する者)を残して、修行に旅立ちました。妻の名は後世の資料ではヤショーダラーと書かれていますが、初期の文献には「ラーフラの母」とあるだけで、名はわかりません。

そして、6年10ヶ月の修行の後、悟りを開きました。年齢は満35歳10ヶ月。月日は2月15日でした。その後は約45年間にわたり布教にいそしみ、満80歳のとき、インドでは猛暑の季節の五月に入滅しました。死因は豚の生肉料理を食べて、食中毒か赤痢のような病気にかかりたためと推測されています。なお、仏教で肉食が禁止されたのは紀元後五世紀ですから、ゴータマ・ブッダから10000年ほども後のことです。

まだ解決されていない最大の問題は生没年代です。生誕は紀元前624年(紀元前463年の間、入滅は前544年ほども後のことです)。

仏教の根本原理というと、とかく四聖諦・八正道・十二因縁が挙げられます。しかし、そんな難しい理屈は、『スッタニ・パータ』にはまだ出てきません。ただし、四聖諦(4つの聖なる真実=苦集滅道)については、いわば部品にあたる記述はあちこちに見出せます。苦=苦しみ、集=苦しみが起ころ原因、滅=苦しみがすべて滅するところ、道=苦しみがすべて滅するところへと導く方法が、まだバラバラの状態で説かれているのです。これらの部品が組み立てられて、きれいに体系化されたのは、ゴータマ・ブッダの入滅からかなり後の時代のことだつたようです。

『スッタニ・パータ』は全部で五つの章から構成されています。

学ぶ仏教 第二回

最古の仏典

『スッタニ・パータ』から

正木 晃

●『スッタニ・パータ』●

それでは、『スッタニ・パータ』を読んでみましょう。「スッタ」は経、「ニ・パータ」は集成という意

味なので、全体では「(ゴータマ・ブッダ)の教えを集めた經典」になります。教えは詩句の形で、語られています。いわゆる韻文經典です。なぜ韻文だったのかというと、口伝えするのに、散文でのこぼりも、韻文の滑らかで調子の良い詩句の方が、ずっと暗誦しやすいからです。

日本では、中国の唐初期に書かれた『周書異記』に記されている紀元前1029年(前949年)という、とんでもなく古い生没年代が信じられていました。

● 原始仏典 ●

確定していません。ちなみに、道元禪師や瑩山禪師の時代の日本では、中国の唐初期に書かれた『周書異記』に記されている紀元前1029年(前949年)という、とんでもなく古い生没年代が信じられていました。

にはいません」と言われるよりも、「ここにいますよ、聞いていますよ」という感覚の方が、日本人のメンタリティには合っているのかかもしれませんね。

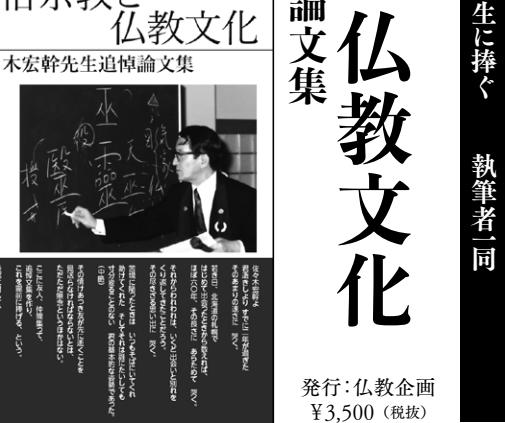
奈良住職…おっしゃる通りです。神道でも、魂は天に行くけれど、家にも宿り、お墓にも宿ると考えます。多重的な所在を認めるのが日本人の死生観です。「草葉の陰から見ている」という感覚が、道徳や安心感の基盤になっている。だからこそ、私は「位牌は亡くなった人と語り合うためのものだから、兄弟それが作つてもいいし、もっと大切にすべきだ」と伝えています。ひとつの人をバラバラにするわけではなく、それぞれの場所で対話ができるべきなのです。

650年守った難解さ
消えゆく分かりやすさ

人口減少と宗教離れが進む中、多くの寺院が開かれた寺を目指し、敷居を低くしようと試みている。この現状に対し、能楽師・安田登氏は、能が650年にわたり存続できた理由は、逆説的だが大衆に迎合しなかったことにあると分析する。

かつて能は、武家の子弟が「悪いことをすると能を見せるぞ」と叱られるほど、退屈で難解なものであったという。だが、同氏は「マーケティングの視点で『欲しいもの』を提供し続けば、伝統はやがて飽きられ、捨てられる」と語る。映画がトーキーとなり、カラーとなり、VRへと刺激を強めていくよう、大衆の欲望に際限はない。これに対抗しようとすれば、本質を見失う恐れがある。安田氏の言葉を借りれば、分かりやすさを追い求めたところ、「悪い」という一線を守り続けた。難解さや苦痛を排除せず、観客に能動的な鑑賞を求めたのである。

この事実は、寺院運営においても示唆に富む。現代風にアレンジした分かりやすい仏教は一世代にわたって、その長さにあらためて、哭く。それからわれわれは、いくど出会いと別れをくり返してきたことだらう。その尽きざる思い出に、哭く。そのじつとり湿った記憶に、哭く。君のジョークには、いつも笑い転げ、深夜の巷を迷い、激論を呼び、会えばたちまち酒になり、君の基本的な姿勢であった。外にあつてはいつも仲間たちと楽しみ、内にあれば孤独を愛して、研究に打ちこみ、端然としていた。どうだ、こんなこともあった。久しぶりに山の温泉に行き、湯舟につかたときのことだ。そんな静かな勇者、控え目な自由人であったことに、哭く。



発行: 仏教企画 ¥3,500(税抜)

佐々木宏幹先生追悼論文集

執筆者: 同

佐々木宏幹先生追悼論文集

発行: 仏教企画 ¥3,500(税抜)

佐々木宏幹先生追悼論文集

発行: 仏教企

